

持続可能な開発目標 (SDGs)の推進に力が入っているが、これに絡めて賀川豊彦の名前が頻出する。SDGsは貧困のない、持続可能な世界を次世代に受け継いでいくことを目指した世界規模の目標で、社会、経済、環境にわたって17の目標、169のターゲット

賀川豊彦の歩み

ト、2300の指標が設定されている。多様でいくつもの領域をまたいだの取り組みが求められることから、社会運動、労働組合運動、農民運動、協同組合運動などに取り組んだ賀川の識見と行動力に学べ、ということなのであろう。評論家の大宅壮一は、日本民族に最も大きな影

農的社会デザイン研究所代表・蔦谷栄一氏

貧困のない世界めざして

不屈精神 賀川に学ぶ

響を与えた10人を選ぶとすれば、賀川がこれに入るだけでなく、ベストスリーに入るかもしれないと語っている。賀川はノーベル平和賞、さらにはノーベル文学賞の候補としても推薦された傑出した人物である。賀川に学べと言っても凡人にできる技ではない、というのが正直な思いだ。こんなこともあって、改めて賀川の著作や関係する文献を読み返してみ、われわれが抱いてきた賀川のイメージと実像には大きなギャップがあるように感じている。

一つは賀川を成功者、偉人としてだけ見るのは適切ではない、ということである。賀川は救貧運動、労働運動、農民運動と、分裂と脱退を繰り返した。「時代の主流とずれた」(隅谷三喜男『賀川豊彦』)ところに置かれてきた。こうした各種運動が「人間愛」の基調か

ら分離していくことに幻滅する中で、改めてたどり着いたのがキリスト教伝道であり、協同組合運動であった。その意味では、賀川に学ぶべきは不屈の精神にこそあるのでないか。二つが、賀川が最もこだわりの持ち続けたのが貧困問題であったことである。さまざまな運動に取り組んだことからマルチ人間として賀川を捉えがちであるが、その置かれた情勢・状況の中で、貧困からの脱出を試みた結果が幅広い活動展開となったもので、根っこはあくまで貧困問題の解消にあったように考える。今、貧困問題をどう捉えるか。物質的な豊かさの一方で格差拡大と心の貧しさは募るばかり。このために現実を見定めたの具体的な行動と、不屈の精神が求められていると